

山東町埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

西 代 遺 跡

序

地価の異常な昂騰をよそに、各地の土地開発・整備等々は止むことなく続いています。本町においても例外ではありません。土砂採取、水田の基盤整備、道路の改修・新設等々が盛んにおこなわれ、自然景観の変貌ぶりに眼を覆いたくなる所も、少くありません。

町内全域が遺跡であり史跡であると言っても過言ではない本町です。これらの土地開発等が一方でもたらす破壊から、いかに文化財を守り、事前に調査することは急務であり、担当者の大童が続いています。

本書は、県営圃場整備事業の着工に先立って実施した、周知の“西代遺跡”の発掘調査の報告書です。工事計画書により、遺跡の全面破壊は避けられることと経費・調査期間等の関係もあって、今回は試掘にとどめました。しかし、その狭い試掘箇所からかなり大量のしかも長期間にわたり作り使われたと思われ得る多様な土器類の発見を見ました。中には、本町史の空白時代（縄文時代～古墳時代）解明の手がかりとなりそうなものも含まれています。

小誌たりとも、本報告書が斯界の研究推進や埋蔵文化財への関心をさらに高め、文化財保護のため、大きく貢献してくれることを期待しています。

本調査や本報告作製のため御協力いただいた皆さん、本当にありがとうございました。

平成元年 3 月

山東町教育委員会

教育長 西 秋 良 策

例 言

1. 本報告は、山東町における昭和63年度県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財西代遺跡発掘調査の成果である。
2. 本調査は、滋賀県教育委員会の依頼にもとずき、山東町教育委員会社会教育課が実施した。調査の体制は下記の通りである。

調査主体	山東町教育委員会	教育長	西 秋 良 策
調査事務局	〃	社会教育課	課 長 本 庄 康 男
	〃		係 長 野一色 義 明
	〃		主 事 丸 本 光 雄
	〃		主 事 山 田 悦 麻
調査担当	〃		主 事 桂 田 峰 男
調査補助員	武 立 信 明		
調査作業員	井 関 順 一	鹿 取 恵 正	富 岡 末 吉
	筑 摩 弘	井 関 常 吉	谷 口 千 夏

3. 出土遺物の整理、復元、実測に関しては上記補助員、作業員でおこなった。また、遺物の写真撮影については、寿福 滋氏（寿福写房）を煩した。記して感謝の意を表したい。
4. 本書の編集は桂田峰男がおこなった。

目 次

序

例 言

(目次・挿図目次・図版目次)

坂田郡山東町西代遺跡

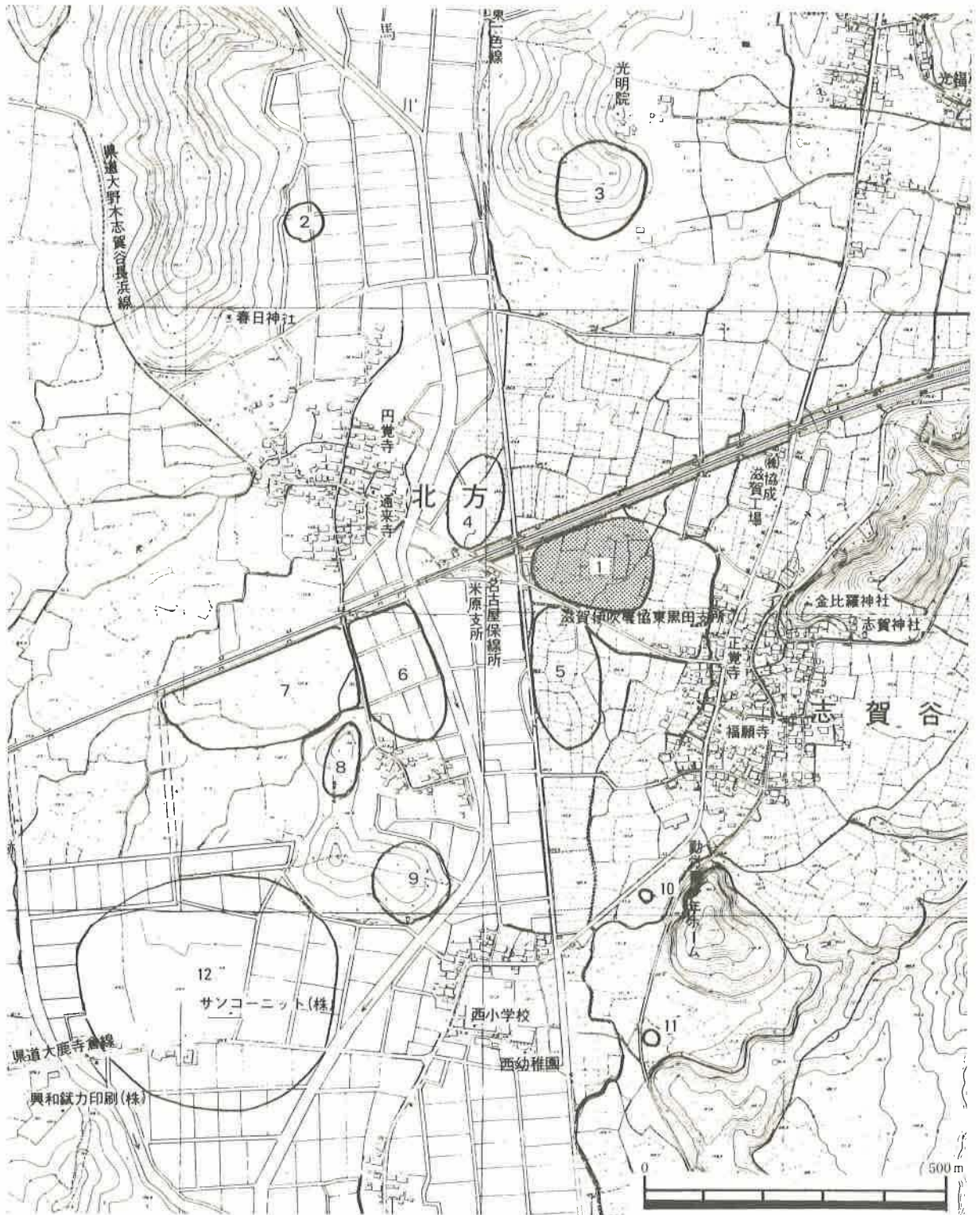
I. はじめに	1
II. 位置と環境	1
III. 出土遺物	4
IV. おわりに	13

挿 図 目 次

図 1	調査地周辺図	
図 2	トレンチ配置図	2
図 3	T-1～4 トレンチ断面図	3
図 4	出土遺物実測図	8
図 5	〃	9
図 6	〃	10
図 7	〃	11
図 8	〃	12

図 版 目 次

図 版 一	調査前風景 作業風景
図 版 二	遺物出土状況 遺物出土状況
図 版 三	出土遺物
図 版 四	〃
図 版 五	〃
図 版 六	〃
図 版 七	〃
図 版 八	〃
図 版 九	〃



- | | | |
|---------|---------|----------|
| 1.西代遺跡 | 2.塚本古墳 | 3.池下城跡 |
| 4.東良遺跡 | 5.時重遺跡 | 6.北方田中遺跡 |
| 7.笹原遺跡 | 8.瓢箪山古墳 | 9.道照寺遺跡 |
| 10.引塚遺跡 | 11.馬塚古墳 | 12.大鹿遺跡 |

図1 調査地周辺図

I. はじめに

本報告は、県営ほ場整備事業に伴う西代遺跡の埋蔵文化財発掘調査にかかるものである。

西代遺跡は、山東町の中央部から北西に向かった大字志賀谷地先に所在し、従来から周知されていた遺跡である。

昭和62年、滋賀県農林部より昭和63年度県営ほ場整備事業について、埋蔵文化財の有無等について照合がなされ、本遺跡がその工区内に周知されていたため、同年12月16日～同年12月24日まで、事前に山東町教育委員会が試掘調査を実施した。

調査の結果、遺構は確認できなかったが、遺物包含層を検出するに至った。この結果をもとに、現地調査を昭和63年5月6日から同年5月19日まで行ない、以後は出土資料の整理調査を実施した。

尚、調査面積は、約1,300㎡（他：設計変更約1,000㎡）であった。

II. 位置と環境

今回の調査地は、坂田郡山東町志賀谷字西代に所在している。この地は、山東町中央部から北西寄り、志賀谷区の北西に位置している。地目はほとんどが水田で、現在の標高は134.9～135.5m付近である。

この山東町中央部から北西寄りの地は、長浜市との境界をなす横山丘陵沿いに黒田川が南流し、山東町柏原に水源をもつ天野川が南部を西流して黒田川と合流するのである。この両河川により開析された沖積地に多くの集落が営まれていると同時に、また多くの遺跡の点在をみるのである。

上向川遺跡^①は、昭和60年度、ほ場整備事業に先立ち発掘調査が行なわれ、8世紀から11世紀に及ぶ掘立柱建物跡と多量の土器を検出した。

北方田中遺跡^②は、昭和59年度に滋賀県教育委員会により、ほ場整備事業に先立ち発掘調査が実施され、8・9世紀及び13世紀にわたる掘立柱建物跡・門跡・井戸跡等が確認されている。これらの建物跡は長岡郷長跡ではないかと考えられている。

菅江遺跡^③は、昭和61年度に土砂採取事業に先立ち発掘調査が実施されており、8世紀後半から後期前半にかけての須恵器窯跡が発見されている。

法泉寺遺跡^④は、昭和61年度にほ場整備事業に先立ち発掘調査が行なわれ、白鳳期の重弧文軒平瓦、複弁八葉蓮華文軒丸瓦、徧行唐草文軒平瓦などが多量に出土した。

これら多くの遺跡が両河川に点在し、西代遺跡もその一つである。

註

①桂田峰男 『上向川遺跡発掘調査報告書』 山東町教育委員会 1987

②田中勝弘・奈良俊哉 『坂田郡山東町内遺跡詳細分布調査報告書』 山東町教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1986.3

③桂田峰男 『菅江遺跡発掘調査報告書』 山東町教育委員会 1986

④桂田峰男 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』 山東町埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 山東町教育委員会 1986

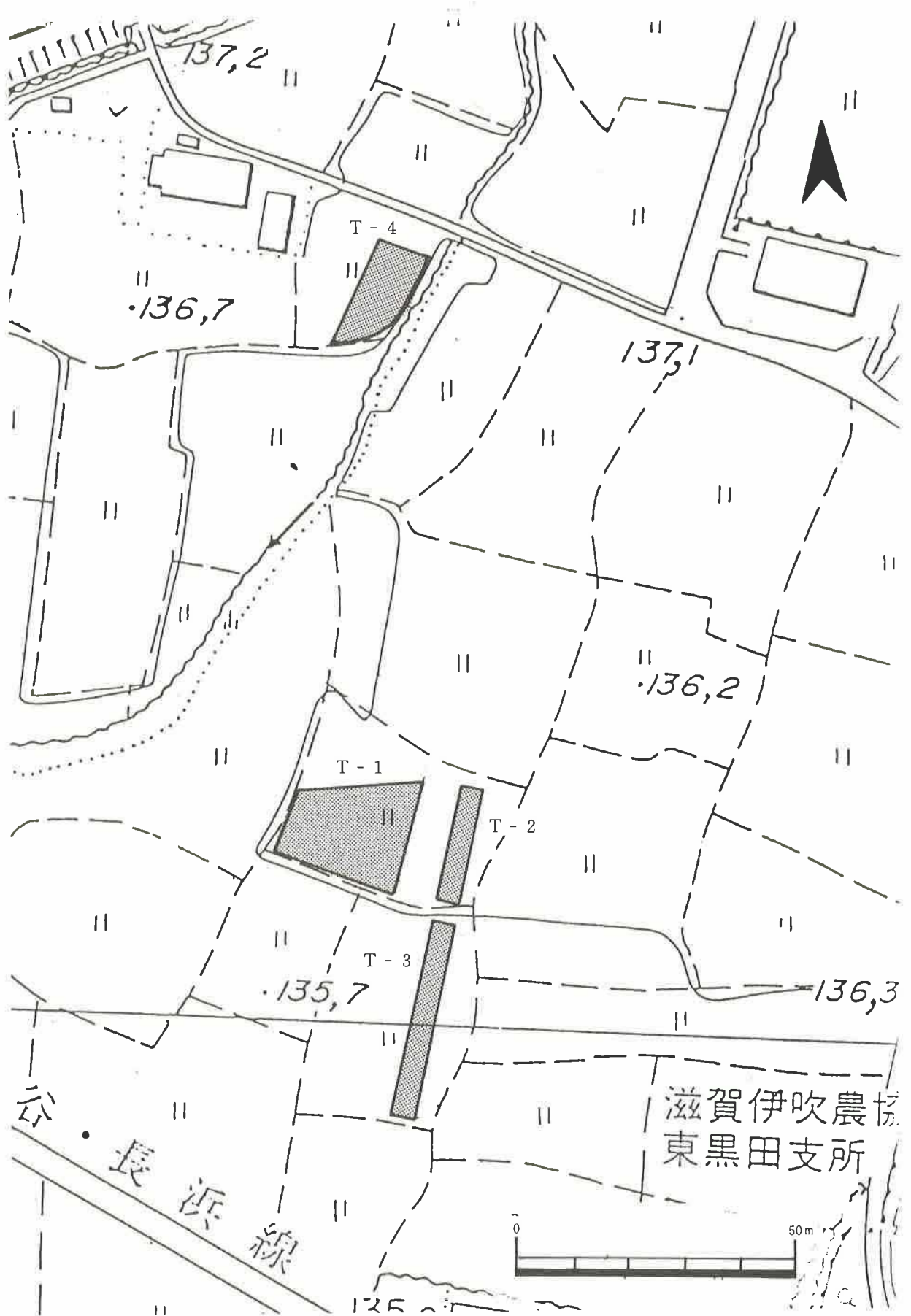


図2 ドレンチ配置図

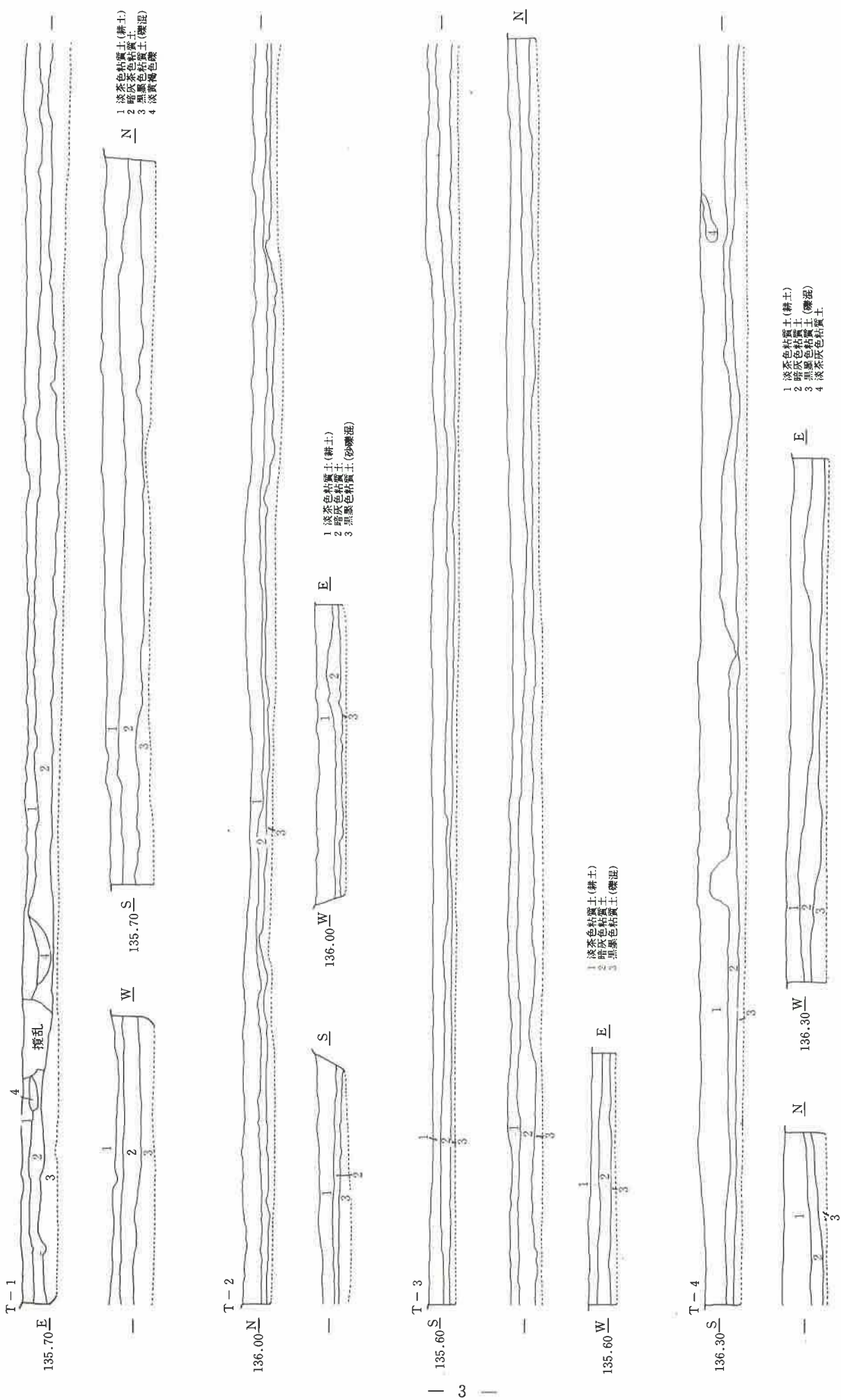


図3 T-1~4トレンチ断面図

Ⅲ. 出 土 遺 物

今回の調査では、前述したように遺構の検出はできなかったが、遺物包含層から多量の遺物が出土した。出土した遺物は、古式土師器・土師器・須恵器等で、古墳時代前期から平安時代前期にかけての時期に相当すると考えられる。ここでは、これらの遺物を一括して報告することとする。

古式土師器

甕

①～⑤は受け口状口縁をもつものである。①は復元口径17.3cmを計り、やや屈曲の甘い受け口状の口縁を有するもので、口縁端部に刻みを有し、口縁部に刺突列点文を施す。頸部には縦位ハケ目の下方に横櫛描文を施す。また、口縁部内面に3条の沈線が認められる。色調は淡赤褐灰色を呈している。②～⑤は頸部から緩やかなカーブを描いて口縁部へ立ち上がる。②は復元口径16cmを計り、体部外面に縦位ハケ目をつけた後、横位ヘラ描文を施こしている。④は口縁部にかすかに指頭文が施こされ、⑤は刺突文を確認することができる。

⑥～⑨は、「く」字形に屈曲して口縁部に至るものである。⑦は復元口径14cmを計り、頸部外面から体部外面にかけてハケ目調整が施こされ、また、口縁端部は肥厚である。色調は淡茶灰色を呈し、胎土はやや不良、焼成は良好である。⑩は復元口径13cmを計り、肩部は比較的なだらかに下る。体部外面には縦位・斜位のハケ目が施こされている。⑪は復元口径20cmを計り、口縁部が外湾気味に立ち上がる。肩部外面は縦位ハケ目、体部内外面に横位ハケ目が施こされている。色調は淡茶灰色を呈し、胎土・焼成ともにやや不良である。

⑫～⑬は底部で、⑭～⑯は凹状を有する。⑭～⑯の底部内面は下から上へのハケ目が施こされている。

⑰～⑳は脚台である。⑰は底径7.2cm、脚部高2.9cmを計る。脚部端は他の⑱～㉒が平坦なのに対してやや尖り気味に収まる。脚部内面はナデ調整が施こされている。色調は、脚部内面が黒色で、外面が暗茶灰色を呈している。

壺

㉓～㉖は口縁部である。㉔は復元口径12cmを計り、頸部よりほぼ真上に立ち上がり、端部でわずかに外反する。内外面共に比較的丁寧に仕上げられている。色調は赤褐灰色を呈し、胎土は良好で焼成はやや不良である。㉕は頸部よりやや外湾気味に立ち上がり、端部は肥厚である。口縁部外面は縦位ハケ目、体部内外面ともに斜位にハケ目が施こされている。㉖は復元口径9cmを計り、やや外湾気味の口縁を有する。頸部外面及び胴部外面に縦位ハケ目が施こされ、胴部内面は横位ハケ目の下方に斜位ハケ目が施こされている。色調は暗赤褐色を呈し、胎土はやや不良、焼成は良好である。

高杯

②⑦⑧は高杯脚部である。②は杯部の一部も残存しており、脚部径3.8cmを計る。脚柱部には2段のスカシ孔が穿たれているのが確認できる。⑧は大きくラッパ状に開く脚部で、底径15.2cmを計る。脚柱部外面は丁寧なヘラ仕上げで、内面はハケ目が施こされている。脚柱部上方に3個のスカシ孔が穿たれている。

⑨は杯部で、柄状の突起を有する杯部が脚上部に封じ込められる所謂、円板充填法を用いている。内外面ともに丁寧に仕上げられており、色調は赤褐色を呈する。

鉢

⑩⑪は鉢形土器で、⑩は復元口径18.6cm、器高8cmを計り、底部は平底で1孔を穿つ。外面は叩き調整の後に半擦り消しを施こしており、内面は下から上へハケ目調整を施こしている。色調は淡茶灰色を呈し、胎土はやや不良で、焼成は良好である。⑪も⑩同様に底部に孔を穿つもので内外面の調整も同じであるが、内面のハケ目はかすかに確認できる程度である。

壺

⑫は壺底部と思われる。底部復元径は8.0cmを測る。

器台

⑬～⑭は器台に相当する。⑬は所謂鼓形器台と呼ばれる器台で、復元口径19cmを計る。端部を外上方へつまみ出す。外面下方にハケ目調整の痕が確認できる。色調は茶灰色を呈し、胎土・焼成ともにやや不良である。⑭は器台杯部で、復元口径21cmを計り、大きく外上方へ開くものである。⑮～⑯は器台脚部であるが、⑮⑰は一部杯部が残存する。全体的に丁寧に仕上げが施こされている。⑮⑰以外は脚柱部に3個のスカシ孔が穿たれている。

土師器

⑱～⑳は底部から直接外上方へ立ち上がり口縁部に至るもので、端部はやや尖り気味に収まる。復元口径は12.3～13cmに収まる。㉑は復元口径12.8cm、器高3cmを計る。外面は回転ナデ調整で、底部外面はヘラ切り痕を残す。また、口縁端部の一部にスス様の痕を残す。㉒は底部からなだらかに立ち上がり、口縁端部でやや内側へつまむ。㉓㉔はなだらかに立ち上がり口縁部で外反するが、端部ではわずかに内傾気味となる。㉕は底部から立ち上がり、口縁部で外反する。㉖㉗は浅皿で、内外面ともに回転ナデ調整が施こされている。

須恵器

蓋

⑤③～⑦⑩までは蓋である。⑤③⑤④は全てを残存していないが、天井部からなだらかに下り、口縁部で内傾する。天井部外面 $\frac{1}{2}$ は回転ヘラ削りで、残りの $\frac{1}{2}$ は回転ナデ調整。内面は $\frac{1}{2}$ ずつで一定方向のナデと回転ナデが施こされている。⑤⑤～⑤⑧は口縁部が所謂Z字状を呈するもので、天井部平坦面からなだらかに下った後、外上方へ強く屈折・外反する。天井部外面 $\frac{1}{2}$ は回転ヘラ削り、残りは回転ナデ調整。内面では⑤⑥～⑤⑧は $\frac{1}{2}$ がナデ調整で残りは回転ナデ調整。⑤⑤は内面全てに回転ナデを施こす。⑤⑨～⑥①は天井部平坦面から下方へなだらかな線を有し、口縁部は凹状をなして内傾する。⑥②⑥③は外上方へ突き出る口縁部を有する。⑥②は復元口径18.1cm、器高4.9cmを計る。天井部中央にやや丸みをおびた擬宝珠様つまみを有し、なだらかに外上方へ下る。天井部外面 $\frac{1}{2}$ は回転ヘラ削りで、残りは回転ナデ調整。内面は $\frac{1}{2}$ が不定方向へのナデで、 $\frac{1}{2}$ は回転ナデ調整が施こされている。⑥④⑥⑤は、口縁部がわずかに凹状をなして外上方へ突き出るものである。⑥⑥～⑦⑩は天井部から下方へなだらかな線を呈し、口縁部がほぼ垂直に下るものである。また、この境において明確な稜を有する。

無台杯身

⑦①～⑧③は無台杯身に相当する。⑦①～⑧⑩は復元口径11.4～14cm、器高2.9～3.6cmを計る。平坦な底部面からなだらかに直接口縁部に至る。底部外面はそのほとんどに回転ヘラ切りが施こされ、体部は内外面ともに回転ナデ調整である。⑦①は口径12.7cm、器高3.1cmを計る。底部外面は回転ヘラ切りの後、雑なナデが施こされ、体部は内外面ともに回転ナデ調整。底部内面は回転ナデ調整の後、一部に一定方向のナデを施こす。色調は淡灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

有台杯身

⑧④～⑧④は無台杯身である。⑧④～⑧⑦は直立的な高台が底部やや内側に貼付されているものである。接地面は平らで接地する。⑧⑥は復元口径16.2cm、器高5.4cmを計る。底部内面は $\frac{1}{2}$ で一定方向のナデが施こされ、残りは回転ナデ調整。体部は内外面ともに回転ナデ調整が施こされている。⑧⑧～⑧⑨はやや底部端にわずかに外方へふんばり気味の高台が貼付されている。接地面は平らで接地する。⑧⑩は復元口径17.6cm、器高6.3cmを計る。底部外面は回転ヘラ切り、内面は不定方向のナデが施こされている。⑧②～⑧⑤は底部端にやや屈曲を呈する高台が貼付されている。接地面は内端面で接地する。⑧⑥⑧⑦は底部外面に回転糸切痕が確認できるものである。底部端に直立気味の高台が貼付する。底部内面端に自然釉が残っており、重ね焼きがされていたと考えられる。

甕

⑧⑧～⑧⑩は甕であると考えられる。⑧⑩は復元口径26.6cmを計り、口縁部は外上方へ立ち上がったのちや

や外反する。端部は丸味をおびて収まる。体部外面に平行叩きの後にやや擦り消しが施こされ、内面には同心円文が認められる。また、体部外面に自然釉が残る。色調は黒灰色を呈し、胎土はやや不良で焼成は良好である。

壺

⑩②は壺に相当するものである。復元口径19cmを計る。口縁部は外上方へ立ち上がり、わずかに外反したのち内方へ屈曲する。体部外面はヘラ様の調整が施こされ、内面は同心円文様がみられる。色調は淡黒茶色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

鉢

鉢に相当するものが⑩③である。復元口径18.6cmを計り、口縁端部は丸みをおびて収まる。口縁部は内外面及び体部内面は回転ナデ調整が施こされている。色調は淡黒灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

円面硯

⑩④は円面硯である。陸部は復元径14cm、海部外径18.1cm、海部U字形部の深さ1cmを計る。陸部はほぼ平らと思われ、海部はU字状を成して周縁に至る。周縁は外上方にのび、端部は丸く仕上げられている。脚部は外反して外下方に下る。脚部には長方形のスカシ窓が刻まれ、外面は丁寧な面取りが行なわれている。天井部内面にナデ調整が認められるが、他は回転ナデ調整が施こされている。

横瓶

⑩⑤は横瓶に相当すると考えられる。口縁部等は欠損しているので不詳であるが、粘土円板を含めた体部が残存する。体部外面には平行叩きの後、擦り消しが施こされ、内面には指突痕が認められる。色調は淡黒灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

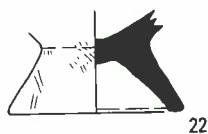
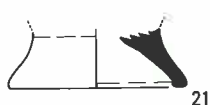
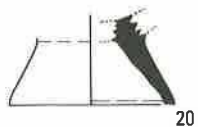
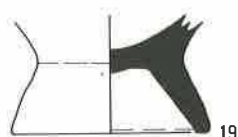
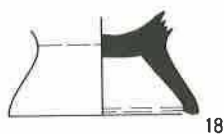
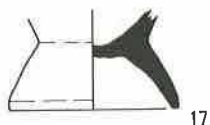
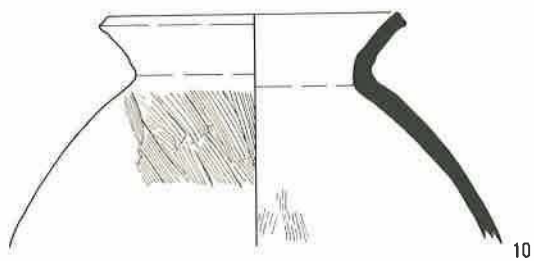
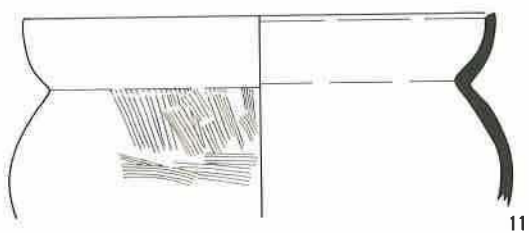
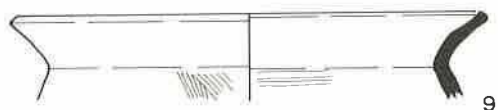
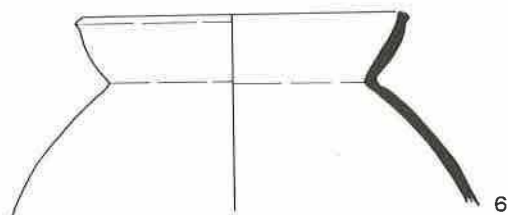
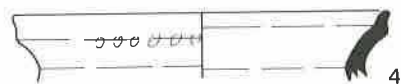
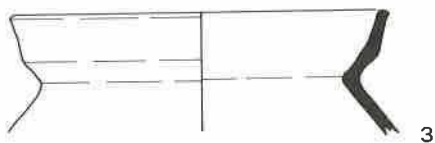
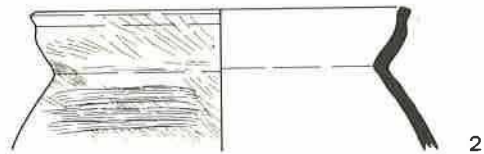
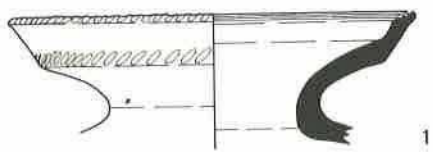


图4 出土遗物实测图

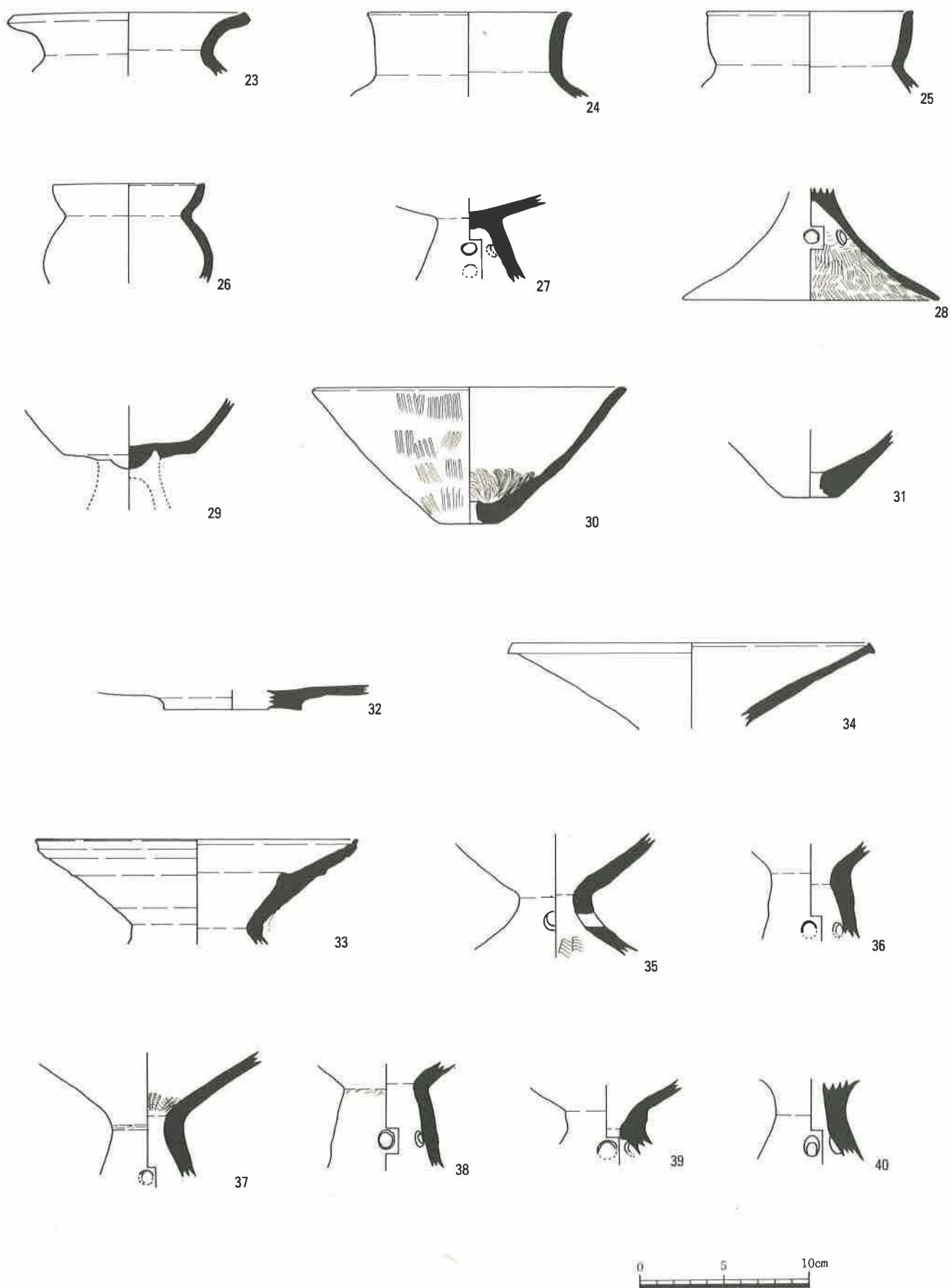


图5 出土遗物实测图

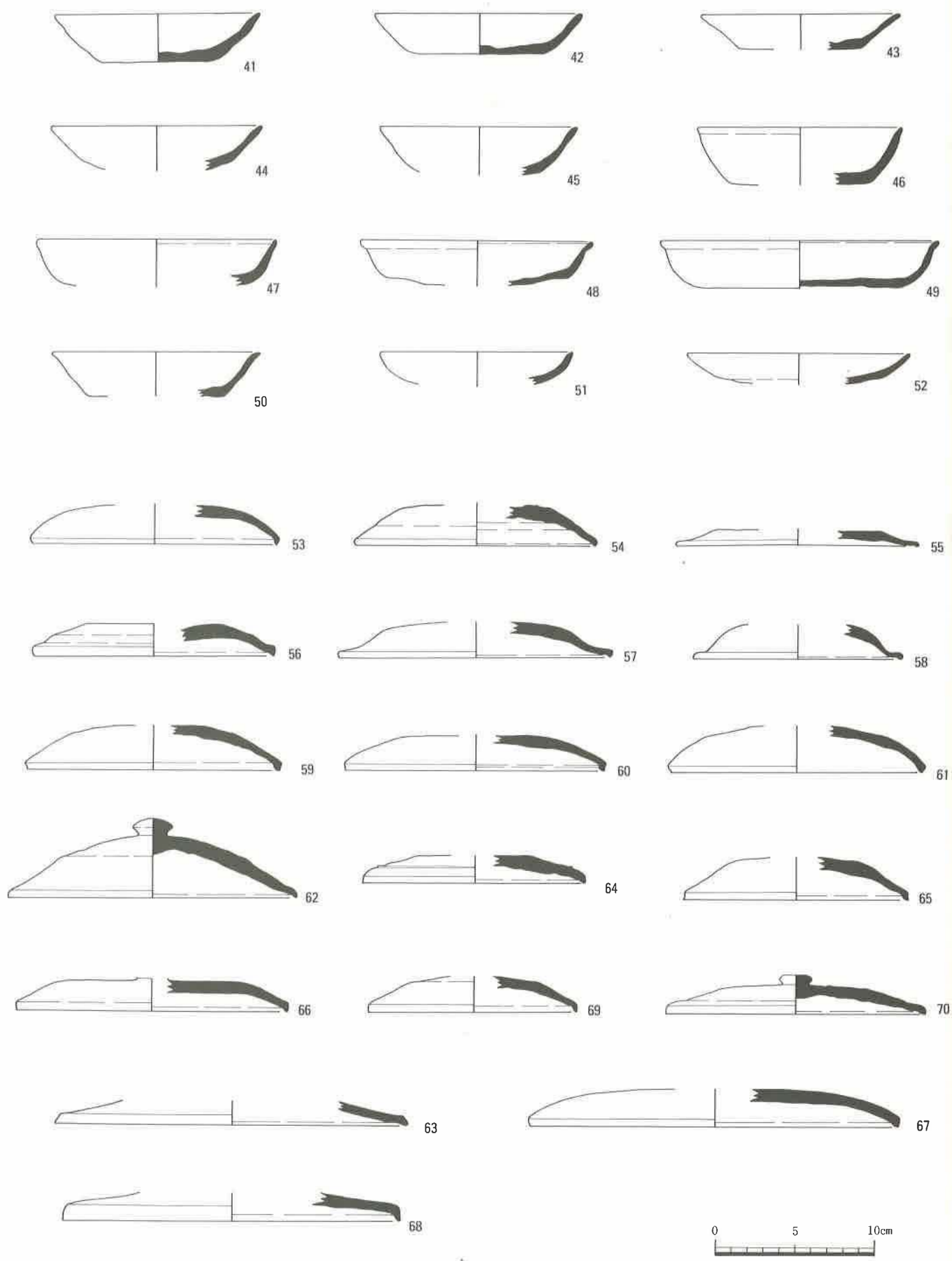


图6 出土遗物实测图

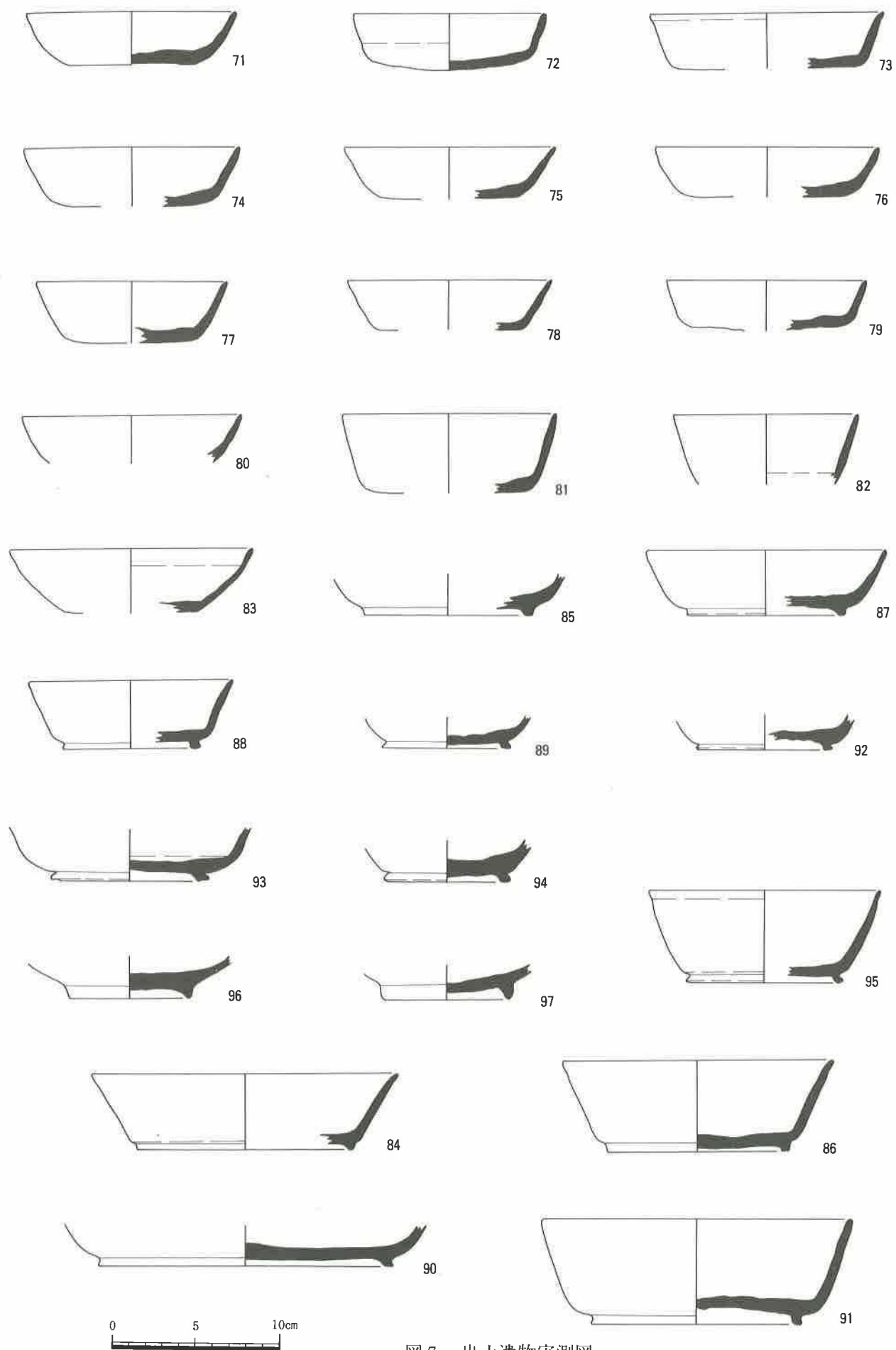


图7 出土遗物实测图

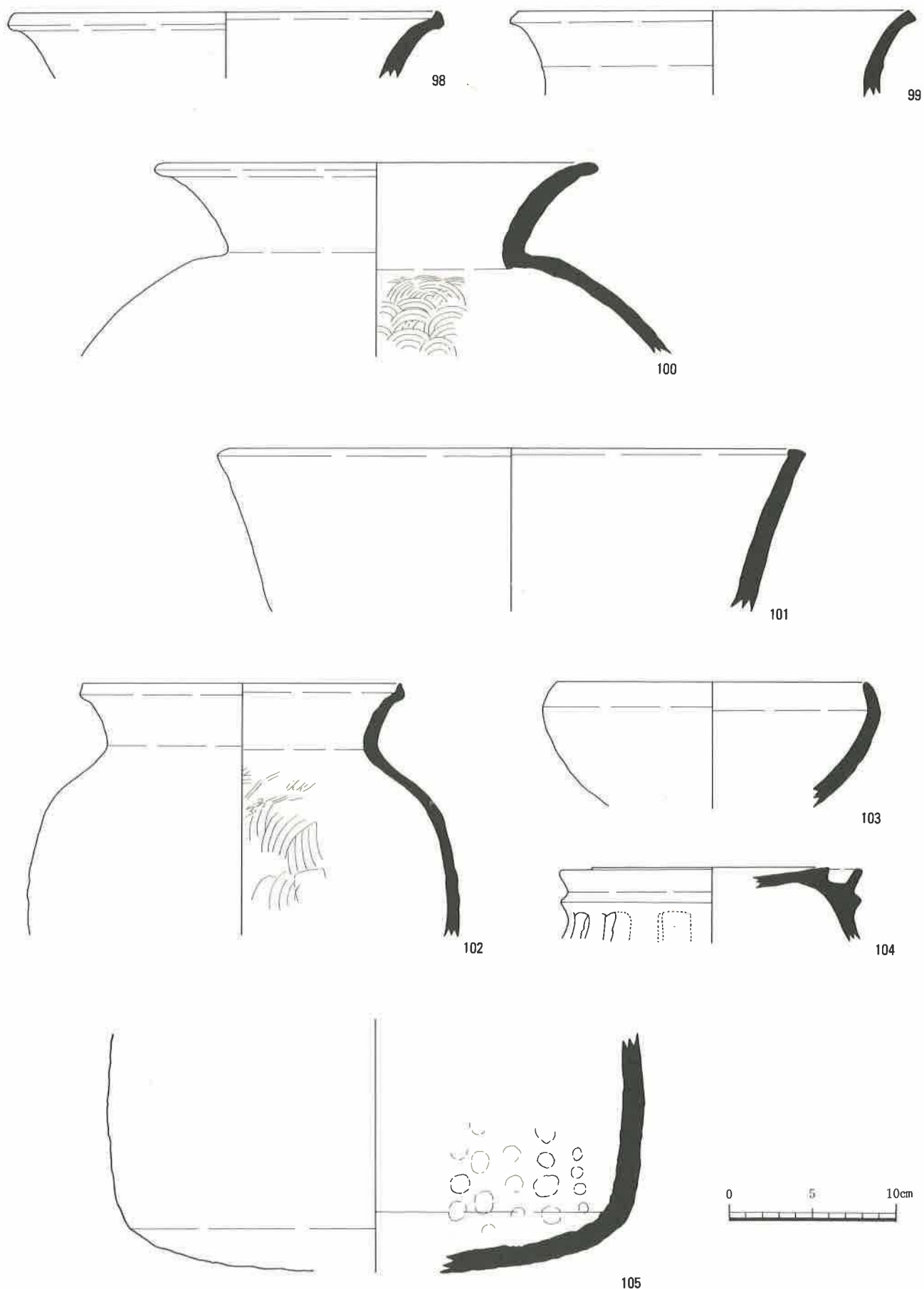


图 8 出土遗物实测图

Ⅳ．お　わ　り　に

今回の調査では、試掘の段階より明確に遺構と考えられるものを検出することができなかった為、包含層に蔵される遺物の検出だけに終わった。遺物の出土状況は、調査地内に設定したT-1～T-4トレンチ全域から出土したが、特にT-2トレンチ全域とT-3トレンチ北過半に集中しており、T-2トレンチ第3層（黒墨色粘質土〔混砂礫〕層）中から、古式土師器を中心とした遺物が多く出土し、同トレンチ第2層（暗灰色粘質土層）からは土師器が比較的検出された。また、T-3トレンチ北過半第2層（暗灰色粘質土層）を中心として須恵器が多量に出土するという状況であった。

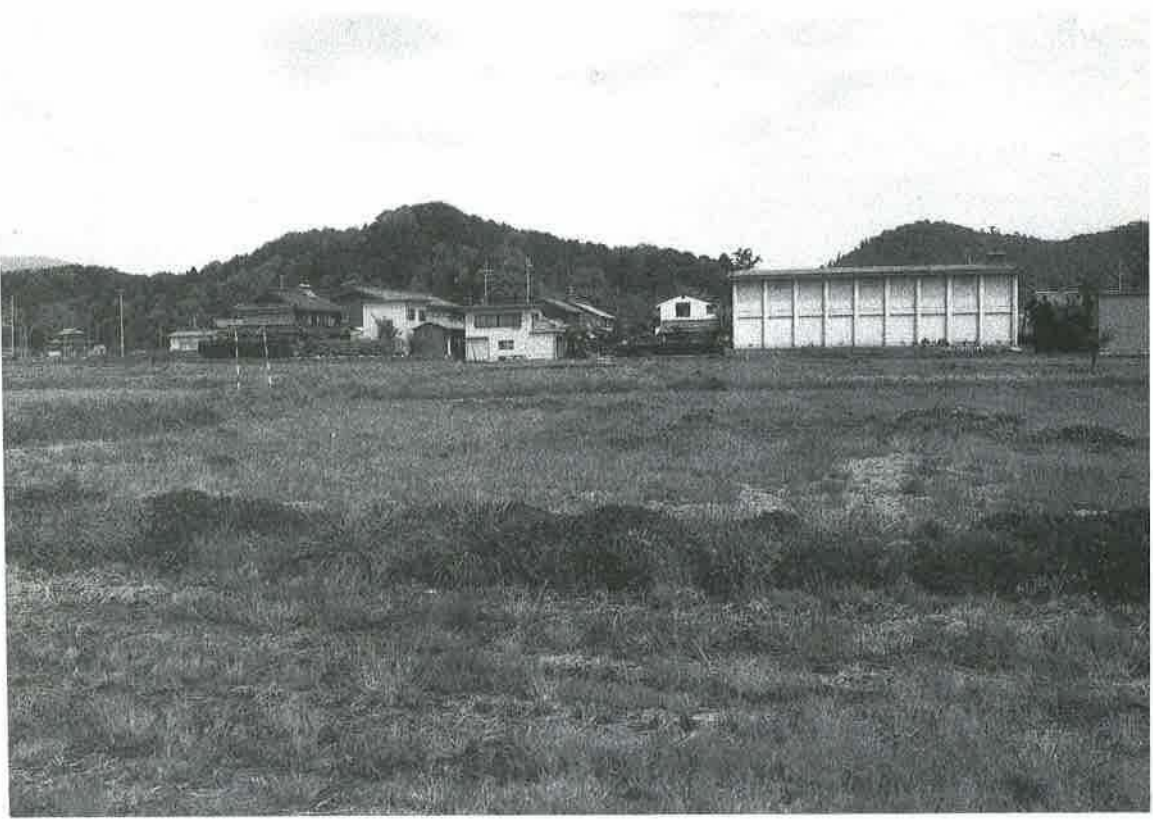
今回、このような状況で出土した遺物は、古墳時代前期～平安時代にかけての時期に相当し、かなりの時期幅を有するものである。従来山東町において、縄文時代の遺跡については中期の番の面遺跡が知られており、また古墳時代の遺跡としては、中期末の息長広姫陵古墳、後期の高岡塚古墳、すも塚古墳などが知られている。奈良時代以降については、近年の発掘調査において多くの遺跡が周知されるようになってきた。しかし、弥生時代から古墳時代前・中期については、ほとんど出土例がなく、空白に近い状態であったと言えよう。ところが今回の調査で、古墳時代前期からの遺物が遺物包含層からの出土ではあったが多量に出土したことは、空白に近いこの時代の実態を解明する糸口となるものと言える。

今回の調査では前述したように、遺物のみを検出し、遺構については確認し得なかった。しかし出土した土器が部分的・一時的に時間の空白があったにせよ、かなりの時期幅を有していることから、周辺において集落が形成されていた可能性があるのではないかと推測される。

このことを今回の出土土器に関して考えると、須恵器の中で底部内面に一定方向のナデが施こされた無台杯身・有台杯身が多く出土している。これらは、当遺跡の西に連なる横山丘陵の舌状突出部に立地する菅江遺跡において焼成されたと考えられる。つまり、当遺跡と菅江遺跡は需要と供給の関係にあり、菅江遺跡から供給される土器の消費地であったことになる。古式土師器についてみてみると、屈曲の甘い受け口状口縁を有する甕など東海系の土器が含まれている。これらは当地の地理的な位置などを考えあわせれば、容易に推測できるもので、当時の交易圏を示唆するものである。また、円面硯が出土していることから、比較的官衛的な色彩をもつ遺跡であると考えられる。当遺跡の西南300mには、時期的に僅かに後世に下るかも知れないが、郷長クラスの建物跡と考えられる北方田中遺跡が位置しており、当遺跡との関連が深いものと思われる。

一方、流れ込みの可能性について考えてみると、当地は姉川の氾濫源であると言われており、T-2トレンチ第3層にかなりの砂礫が混入していた。しかし、そこから出土した多くの古式土師器をはじめとして、全体的に出土土器の保存状態は良く、また、断面観察からも流れ込みの可能性を示唆する層位は確認し得なかった。

これらのことから、当遺跡周辺或いは隣接地に集落が営まれていたと考えられる。今後の発掘調査をはじめとする調査・研究に期待するものである。



調査前風景



作業風景



遺物出土狀況



遺物出土狀況



1



28



10



30



11



41



42

出土遺物



62



70



71



104



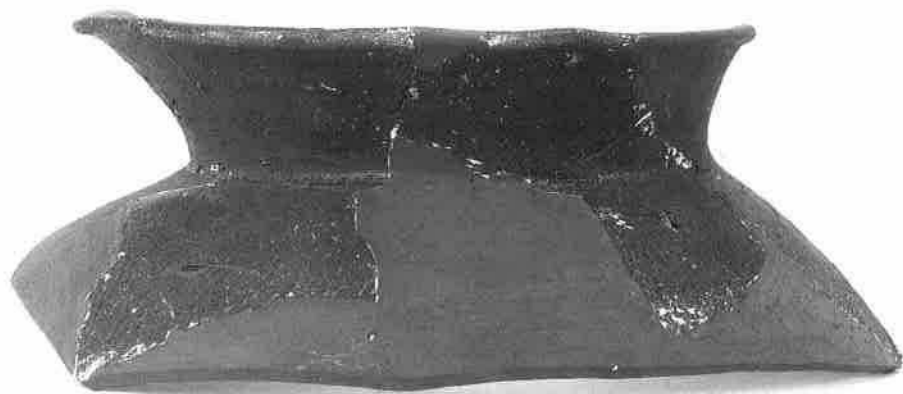
86



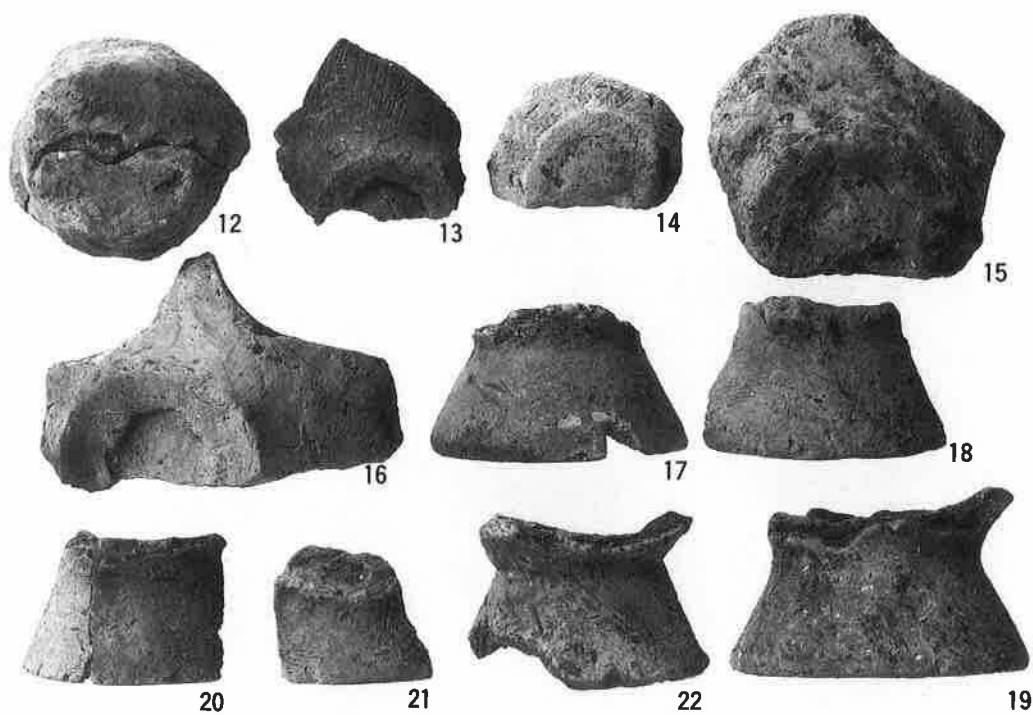
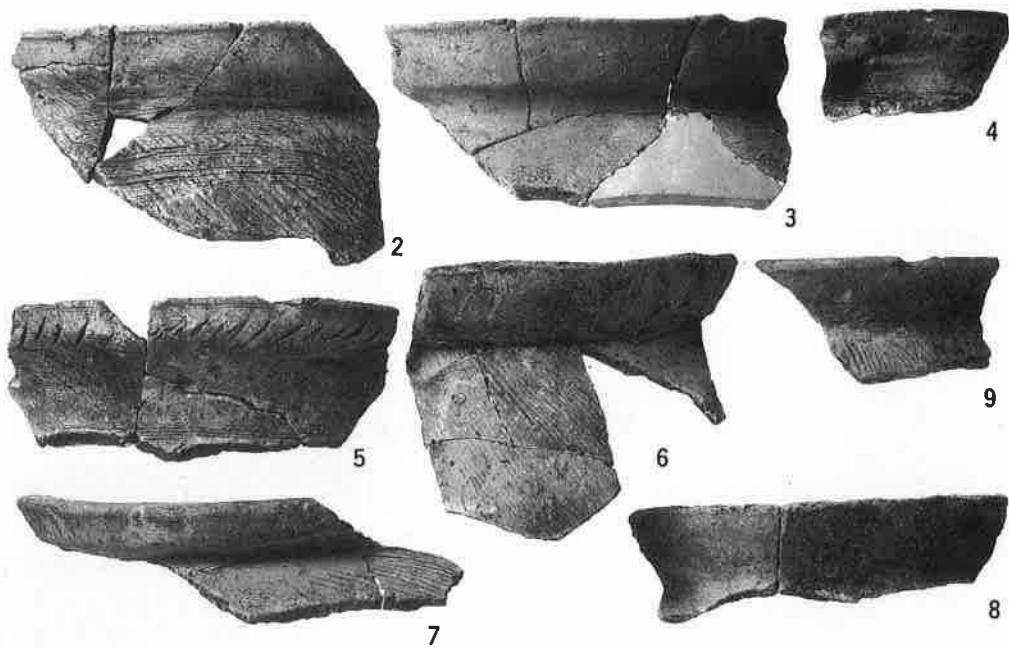
105



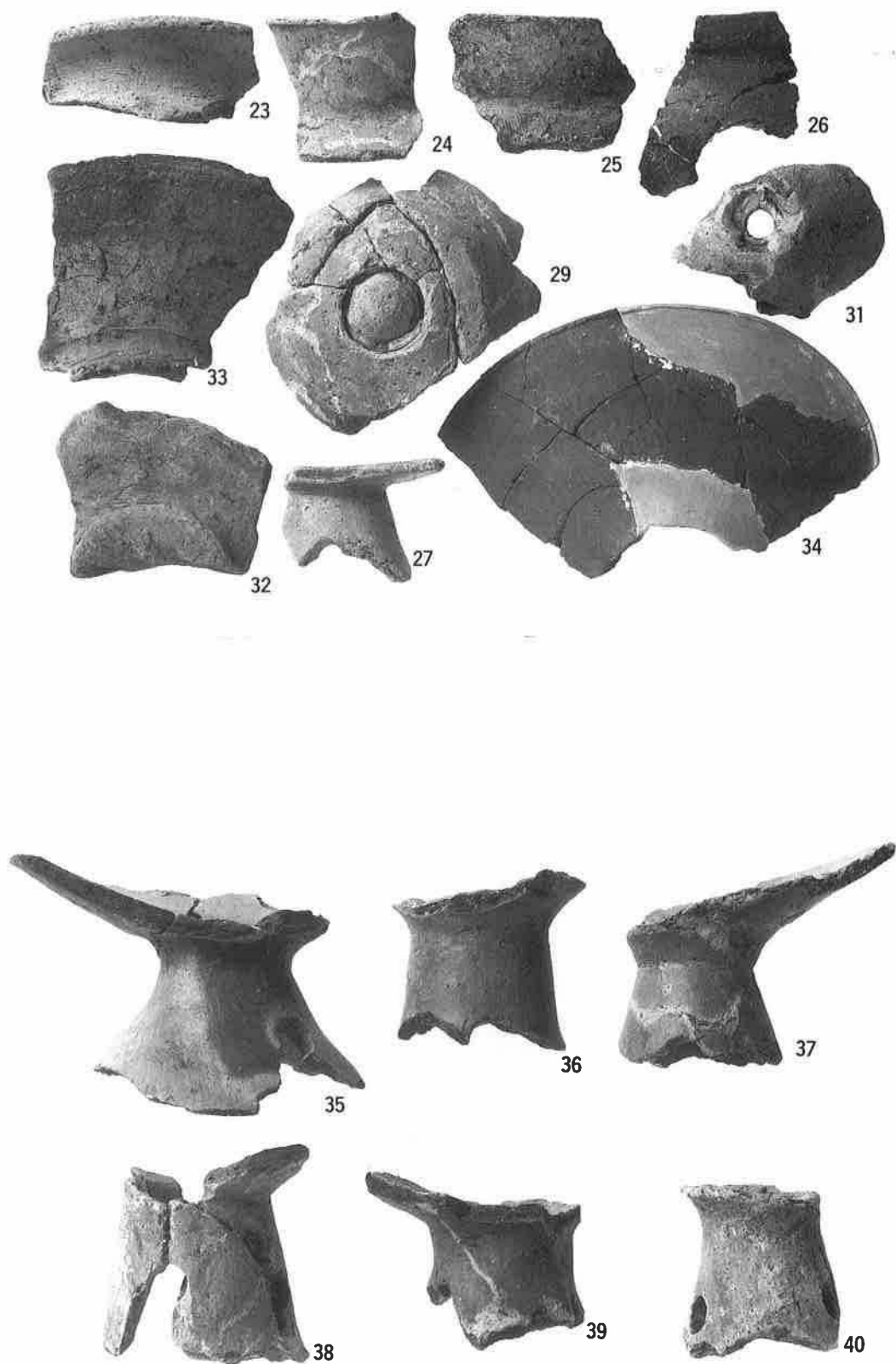
91



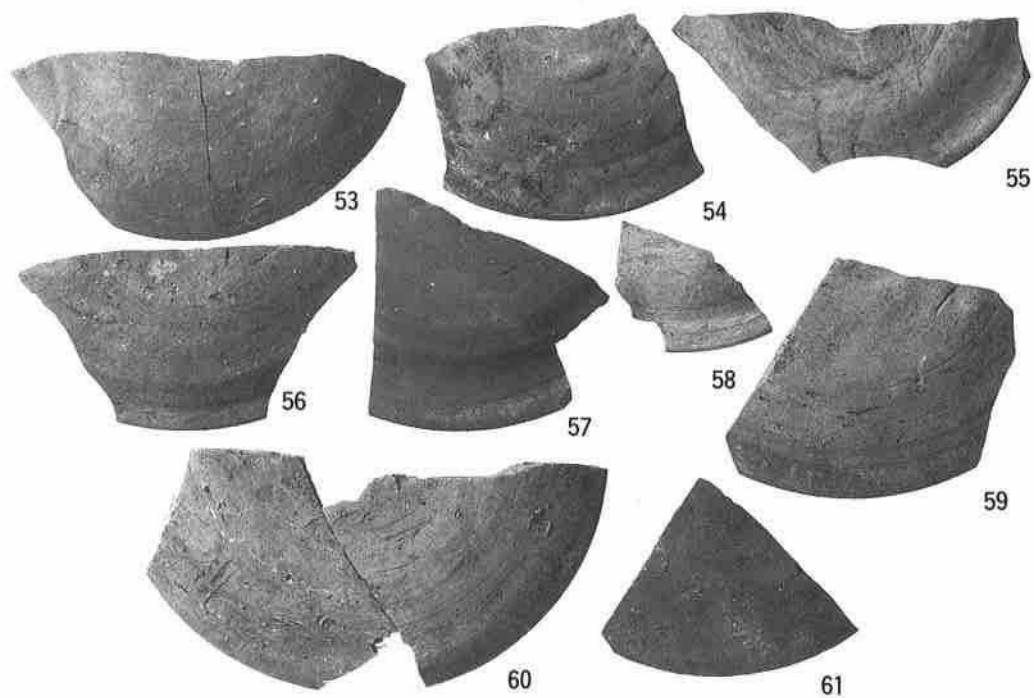
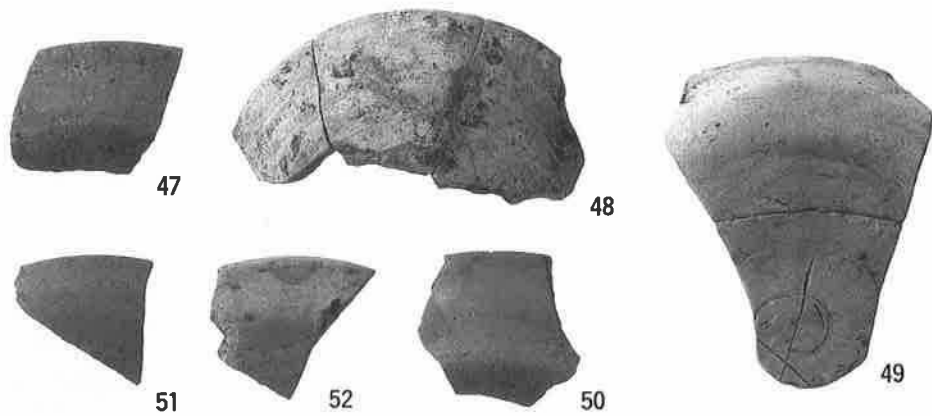
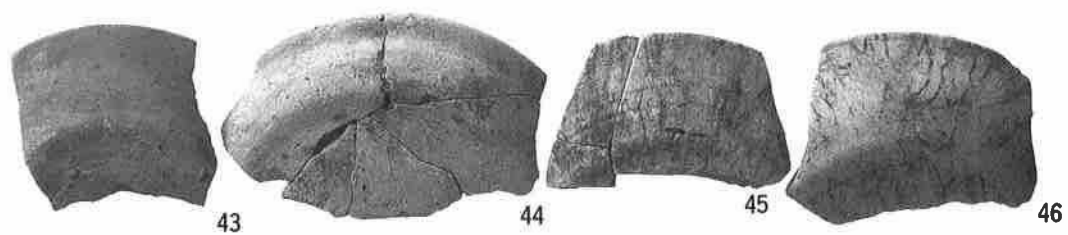
100

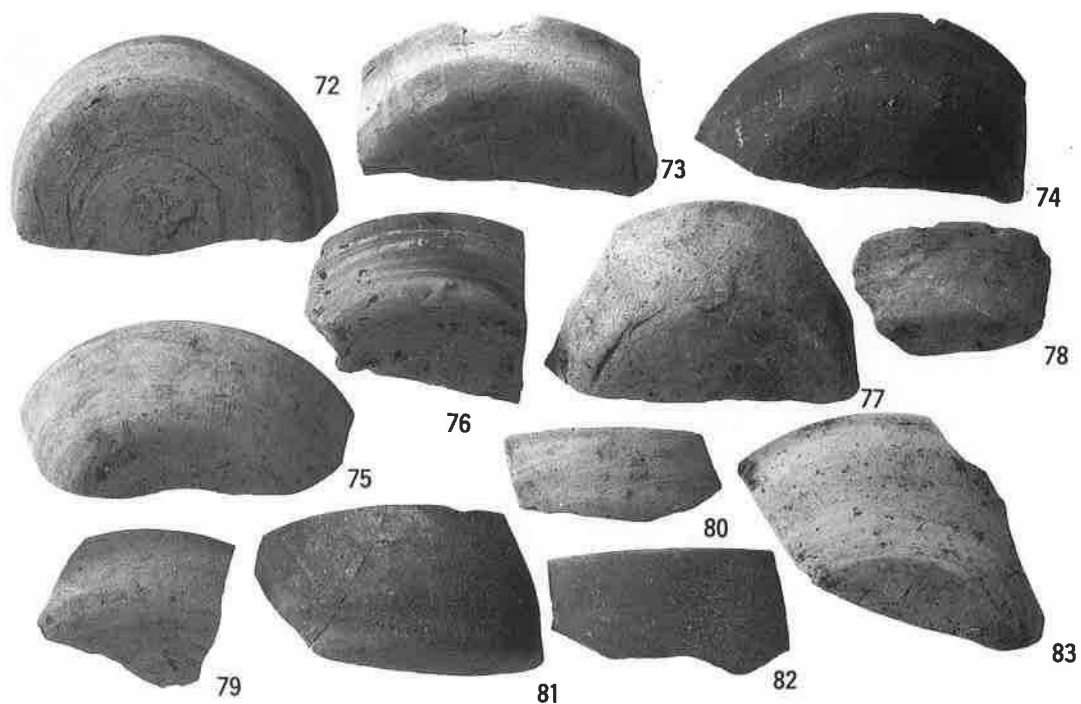
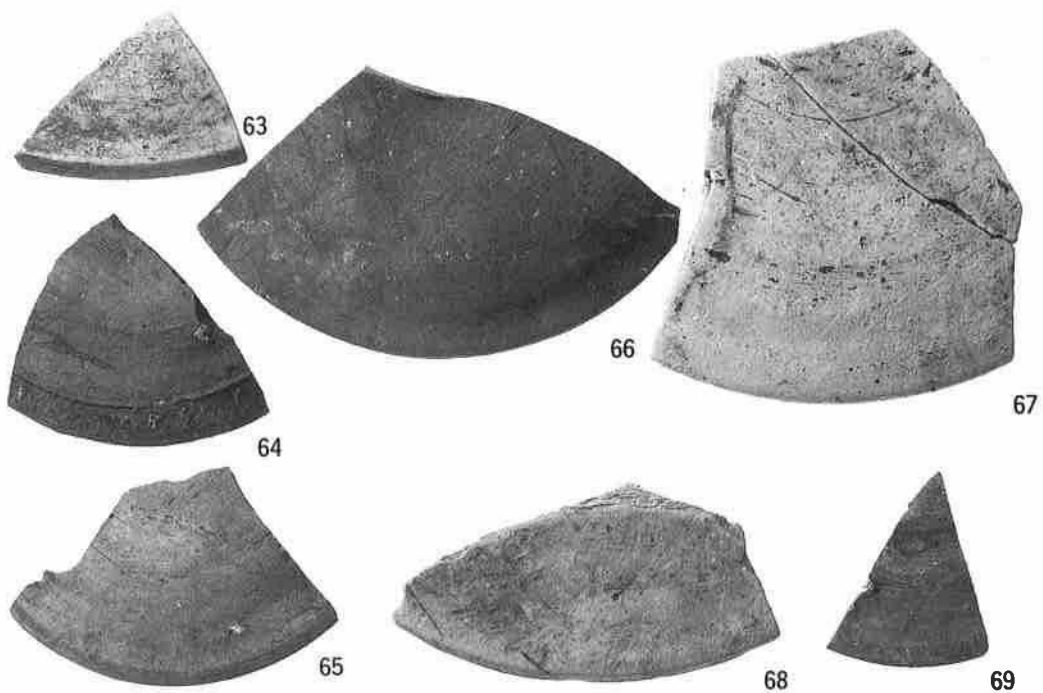


出土遺物



出土遺物





出土遺物

